

平和文化研究 第38集 (2017年度)

8月9日 ボックスカーの見た長崎

～米軍が撮影した長崎原爆記録映像～

大矢 正人

長崎総合科学大学

長崎平和文化研究所

8月9日 ボックスカーの見た長崎

～米軍が撮影した長崎原爆記録映像～

大矢 正人

目次

1, はじめに	2
2, 長崎原爆記録映像について	3
3, 米軍の長崎原爆きこの映像	3
4, 長崎原爆きこの雲映像の解析	8
5, 長崎総合科学大学生の取り組み	11
6, おわりに	15

皆さんこんにちは、大矢です。今日は「米軍の撮影した長崎原爆記録映像」についてお話しします。最初に長崎原爆の被害を撮影した記録映像としてどのような映像があるかを示し、次に原爆きこの雲の映像を見ていただいて、その映像をどのように読み解くか、についてお話しします。今日は学園祭でもありますので、長崎原爆記録映像を使った本学学生の取り組みについてもお話ししたいと考えています。

1, はじめに

原爆被害の記録映像についてよく知られている取り組みは10フィート運動です。皆さんの中にもこの運動に参加された人がおられると思いますが、1980年7月にスタートして、岩倉務さん、橋祐典さん、永井秀明さんなどが中心となって取り組み、米国戦略爆撃調査団が撮影した原爆被害記録映像などを買い戻し、『にんげんをかえせ』や『予言』などの記録映画を作りました。その当時は映像に係わるのはプロの人たちであったわけですが、

現在はデジタル技術を使って、素人でも映像を編集できる時代になっています。このように映像が身近なものになっていますので、今の時代にあった原爆記録映像の活用の仕方を示したいと思っています。

先ほど上菌先生からお話がありましたが、長崎平和文化研究所では科学研究費助成事業として、長崎原爆被害記録映像の研究を7年間取り組みました。その研究の目的は長崎原爆被害の記録映像をデジタル化し、その記録映像に関する研究を行うこと、その結果を「被爆の実相」の解明や「被爆体験の継承」に活用することです。第一期目の2009年度からの3年間は、長崎原爆資料館が所蔵している米国戦略爆撃調査団が撮影した長崎原爆被害の16mmフィルムをデジタル化することを行いました。ビデオテープにはなっていたのですが、簡単に使えるようにBDやDVDにすることを行いました。加えて、戦略爆撃調査団よりも早い時期に撮影された米軍海兵隊の記録映像を米国国立公文書館から入手してデジタル化しました。第二期目

の2012年度からの4年間では、長崎原爆資料館は長崎原爆被害フィルムの中で人体編を所有していなかったため、人体編を含め米国戦略爆撃調査団が撮影した長崎原爆被害記録映像の全部を米国国立公文書館のフィルムからデジタル化し、より鮮明な映像を入手しました。さらにスタンフォード大学フーヴァー研究所のハロルド・アグニュー・フィルムコレクションである長崎原爆きのご雲を含むデジタル映像を入手しました。これらの映像に関する研究成果の一部は研究報告『長崎原爆の記録映像と原爆をめぐる諸問題』という冊子にまとめられています。

2、長崎原爆記録映像について

長崎原爆被害の記録映像で現在所有しているものは4つあります。第1は米国戦略爆撃調査団が長崎を撮影したもので、全体で6時間34分です。第2は日本映画社が撮影した『広島・長崎における原子爆弾の影響』で長崎部分の1時間18分です。これは広島部分を含めたものが株式会社日映映像から販売されています。第3が米軍海兵隊の映像で、長崎部分の1時間33分です。これはまだ全部ではありません。第4が長崎原爆きのご雲を含む映像でスタンフォード大学のフーヴァー研究所のハロルド・アグニュー・フィルムコレクションで、時間的には8分と短いものです。この最後の3分間に長崎原爆きのご雲が映っています。

米国戦略爆撃調査団撮影隊のメンバーは10名で、撮影隊長ダン・B・ダイヤー、撮影監督ダニエル・A・マクガバン、プロデューサー ハバード・スッサン、兵隊カメラマン ボルム、ウィルボースキー、下村道雄（二世の通訳）、日本人コック、列車ボーイ2名、三村明（1月31日に東京を出発して参加）です。1945年10月30日、長崎に到着し、11月3日から本格的な撮影を開始、11月中旬に撮影をいったん終了しましたが、1946年1月8日に撮影を再開し、2月上旬に終了しました。

一方、日本映画社の方はそれよりも早く1945年9月中旬から1946年1月下旬まで撮影しています。製作スタッフは、プロデューサー加納竜一、監督 奥山大六郎、相原秀二、伊東寿恵男、小畑長蔵、撮影監督8名、この他に、演出補助、撮影助手、進行係、スチール担当を含め32名です。

今日は長崎原爆きのご雲映像を皆さんに見ていただいて、私たちの取り組みについてお話ししたいと考えています。

3、米軍の長崎原爆きのご雲映像

米軍の長崎原爆きのご雲映像の話に入ります。アメリカのスタンフォード大学フーヴァー研究所にはハロルド・アグニュー・フィルムコレクションがあります。ハロルド・アグニューはアメリカの物理学者で、1921年3月に生まれて、2013年9月29日に92歳で亡くなりました。1942年にシカゴ大学の原爆開発チームに参加して、広島への原爆投下の時はグレート・アーティストに搭乗して爆風の強度を測定すると同時に、ベル&ハウエル16mm撮影機を持ち込んで広島原爆きのご雲を撮影しました。今日見ていただく映像の中にある広島原爆きのご雲の白黒映像です。長崎の原爆投下時は自分は乗り込まないで、搭乗者にカメラを渡して撮影を依頼しました。今日見ていただくのはその時のカラー映像です。その後アグニューは水爆の軽量化の開発に従事し、1970年にロス・アラモス研究所の所長になり、1979年には原発メーカーのゼネラル・アトミックス社の社長になっています。1980年に所有していた映像をフーヴァー研究所に寄贈しました。10フィート運動の岩倉さんがアメリカに行ったのはこのタイミングだったわけです。

今回は2014年2月3日付で「ハロルド・アグニュー フィルム複写同意書」にサインして、この映像を入手しました。但し、米国国立公文書館の映像のように著作権フリーではないので、利用に当たってはいくつか制約があります。この16mmフィ

ルムの映像をスキャンして、ハードディスクに保存して日本に送り、日本でBDとDVDにしました。この作業は資料映像バンクの山内隆治さんをお願いしました。2014年8月9日のNBC報道特集では長崎原爆が取り上げられ、NBC長崎放送の長征爾さんが解説し、この長崎原爆きのご雲映像が放映されました。



写真3-1 フーヴァー研究所にて

【写真3-1】は長征爾さんが2014年7月にフーヴァー研を訪問した時、レイチェル・バウアー学芸員からフィルムを見せてもらったところで、【写真3-2】がその16mmフィルムで、そこに“ORIGINAL”という文字が見えます。



写真3-2 オリジナルフィルム

これが撮影したオリジナルフィルムであることを確認したわけです。では、この映像を見ていただきます。

【映像のショットリスト】

1. Footage (16mm): 000-007, Timecode (BSP): 01:00:00:00
看板“アメリカ人共同墓地 / テニアン島” (カラー)
2. Footage (16mm): 007-013, Timecode (BSP): 01:00:18:03
旗のポール, テニアン島 (カラー)
3. Footage (16mm): 013-041, Timecode (BSP): 01:00:28:07
北部にある飛行場のパノラマショット, テニアン島 (カラー)
4. Footage (16mm): 041-054, Timecode (BSP): 01:01:15:13
広島の子のご雲 (白黒)
5. Footage (16mm): 054-059, Timecode (BSP): 01:01:37:25
広島の子のご雲 (白黒)
6. Footage (16mm): 059-090, Timecode (BSP): 01:01:44:25
爆撃機グレート・アーティスト (識別機番第89号機) と広島から帰還したクルー
7. Footage (16mm): 090-092, Timecode (BSP): 01:02:36:10
爆撃機エノラ・ゲイ (識別機番第82号機) (白黒)
8. Footage (16mm): 092-110, Timecode (BSP): 01:02:39:08
広島の子のご雲 (白黒)
9. Footage (16mm): 110-131, Timecode (BSP): 01:03:09:20
長崎に向かう爆撃機 ボックス・カー (識別機番第77号機) (カラー)
10. Footage (16mm): 131-159, Timecode (BSP): 01:03:45:08
長崎の子のご雲 (カラー)

1 1. Footage (16mm): 159-161, Timecode (BSP): 01:04:30:28

ブラック

1 2. Footage (16mm): 161-211, Timecode (BSP): 01:04:35:02

長崎の核爆発と雲 (カラー)

1 3. Footage (16mm): 211-260 (end), Timecode (BSP): 01:05:58:08

長崎のきのこ雲 (カラー)

次に、この動画の映像などを説明します。



写真3-3 テニアン島



写真3-4 北部の飛行場

【写真3-3】の看板に“テニアン島”と記されています。【写真3-4】がテニアン島北部の空軍基地で、【写真3-5】がボックス・カーの搭乗員で

10名ですが、さらにあと3名が参加しています。この写真の後方右端が機長のスウィーニーです。



写真3-5 ボックス・カーの搭乗員



写真3-6 ボックス・カー

【写真3-6】が長崎に向かって飛行中のボックス・カーです。後ろのテルマークに注目してください。識別機番第77号機のボックス・カーのテルマークは、【写真3-7】のように元々矢印マークですが、【写真3-8】に示すように、長崎出撃時にはテルマークが矢印からトライアングルNに変更されました。先ほどの映像を左右逆転すると【写真3-9】のように明らかにトライアングルNですから、この機はボックス・カーだということがわかります。このことからこの映像は並走しているグレート・アーティストから撮影したというこ

とになります。



写真3-7 ボックス・カー

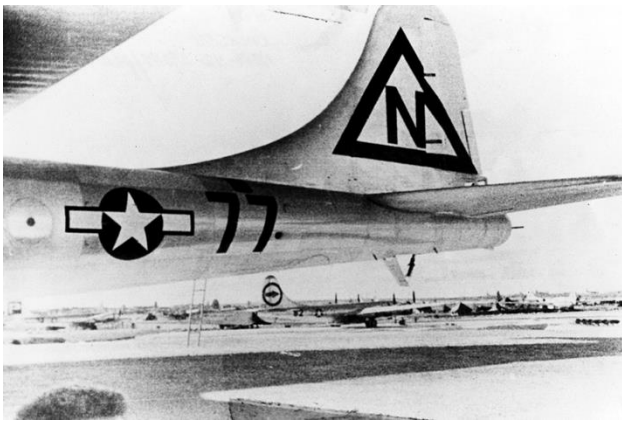


写真3-8 ボックス・カーのテルマーク



写真3-9 ボックス・カー（反転したもの）

長崎の場合は米軍機5機が参加していて、ボックス・カーが原爆搭載機、グレート・アーティストが威力測定のためのラジオゾンデ搭載機、それか

らビッグ・スティックが写真撮影機です。さらに天候偵察機2機が参加しました。最初の3機のうちビッグ・スティックは屋久島上空で合流できなくて、小倉、長崎に同時に向かったのはボックス・カーとグレート・アーティストの2機です。

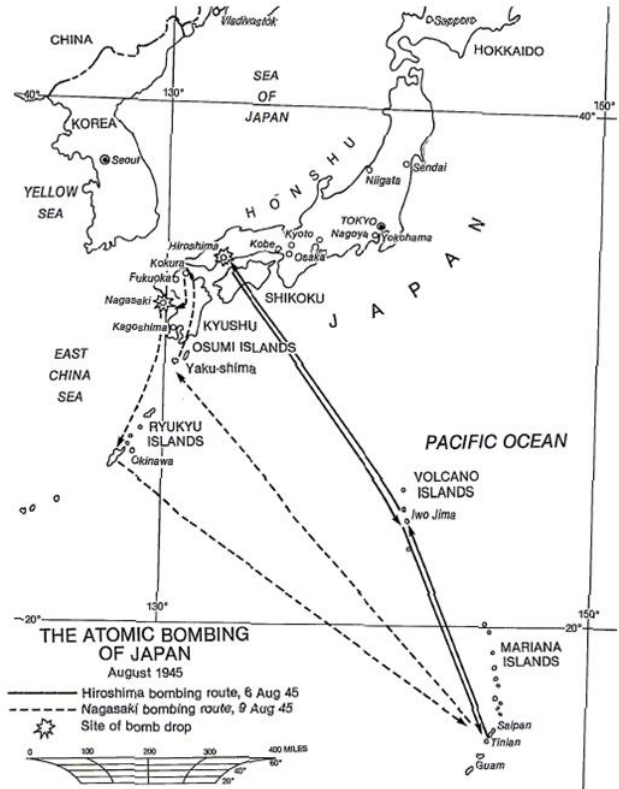


図3-1 飛行ルート

【図3-1】はテニアン島から屋久島、小倉に行き、長崎で原爆投下して沖縄を通過してテニアン島に戻ってくる飛行ルートです。【写真3-10】は2008年に出版された本『JAPAM 1945 From Operation Downfall to Hiroshima and Nagasaki』の長崎上空での2機のB29の図ですが、前がボックス・カーで後がグレート・アーティストで長崎市上空でのそれぞれの飛行ルートを書いてあります。この本によると原爆投下後、ボックス・カーは60度傾いて155度右旋回、グレート・アーティストは155度左旋回と記されています。

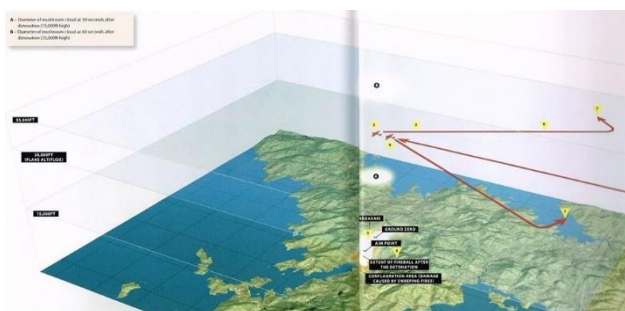


写真3-10 長崎上空の飛行ルート

一方、機長のスウィーニーの本『私はヒロシマ、ナガサキに原爆を投下した』の243頁では「投下の瞬間、突然4.5トン軽くなった機体は、上方に跳ね上がった。午前11時1分だった。爆弾倉の扉はまた音をたてて閉じた。私は爆風を避けるために、北東に向けて、155度の急降下で機体を左へ急旋回させた」と記しています。この本の英語版『WAR's END-An Eyewitness Account of America's Last Atomic Mission』では「I took us into a steep, diving, 155-degree turn to left, in a northeasterly direction」となっていますので、「北東に向けて、急に降下し、155度左旋回した」です。このように二つの本の記述が食い違っているのです。投下後のボックス・カーの旋回方向はどちらが正しいのかという問題があります。

また、フランク・W・チンノックの本『ナガサキー忘れられた原爆』の121頁では「パッピー・デハートは、飛行機の後方の座席に座ってシネカメラで爆発の様を撮影しながら、説明をつけ加えようとしていた」との記載があります。アルバート・デハートはボックス・カーの搭乗員（尾部銃手）ですから、きのご雲を撮影したのはボックス・カーからだということになります。一方、先ほど言いましたように飛行中のボックス・カーをグレート・アーティストから撮影しています。そうすると何台のカメラで撮影したのか、ということになり、この点も確認したいと思っています。これ以外にも、グレート・アーティストでは誰が撮影

したのか、爆撃機内のどの場所から撮影したのか、爆撃機は原爆投下後どのルートを飛行しながら原爆きのご雲を撮影したのか、なぜ記録映像の一部が左右逆転しているのかなど、原爆きのご雲映像に関して解明すべき研究課題はたくさんあります。

（注1、講演後の研究結果について：ボックス・カーの搭乗員であるフレッド・オリヴィの英語の本『Decision at Nagasaki: The Mission That Almost Failed』の125頁によると、「10,000ポンドのファットマンが離れた時、ボックス・カーは突然飛び上がった。スウィーニーが機を155度左旋回し急降下した時、私は身を引き締めた。私は数え始めた、1秒、2秒、3秒、4秒……。約45秒後、私はファットマンが不発弾ではないかと心配し始めていた。突然、千の太陽の光が操縦室を照らした」と記しています。また、この本の202頁では、田中孟さんから送られてきたとされる【図3-2】が掲載されています。

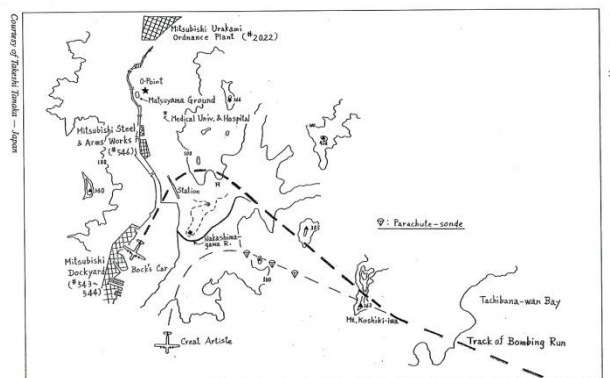


図3-2 長崎上空の飛行ルート

この図は田中孟さんの冊子『長崎の原爆はこうして投下された』の27頁の第3図です。前に示した本『JAPAM 1945 From Operation Downfall to Hiroshima and Nagasaki』の図とは異なり、ボックス・カーとグレート・アーティストが共に、左旋回していることになっています。

フーヴァー研究所のホームページのハロルド・

アグニューの紹介記事では「長崎作戦では、彼は尾部銃手（複数）にカメラ（複数）を与え、核爆発の場면을撮影するよう指示した」と記され、『Agnew on Gen. Groves / Atomic Heritage Foundation』のハロルド・アグニューによる部分では「長崎作戦では、私は攻撃用飛行機と計測用飛行機の尾部銃手（複数）にカラーフィルムのカメラを持たせた」となっています。

さらに『Discovering Alvarez』のグレート・アーティスト搭乗員のローレンス・ジョンストンによる部分「The War Years」では「長崎原爆を落とした時、私は装置に走り、グッドマンは小さな窓から8mmカメラで爆発の映画を撮った」「アグニューは長崎作戦の前に原爆搭載機と我々の機の尾部銃手にカラー動画カメラを与え、彼らは爆発直後の良い映像を得たと言っている」と記されています。

また、『Manhattan Project Voice』のウォルター・グッドマンのインタビューによると「彼はグレート・アーティストから長崎原爆を目撃し、きのこ雲の動画を撮った」と紹介され、「爆撃手は雲の隙間を見つけ、原爆を投下した。それは私が映画を撮り始めた時だった。・・・動画はBell & Howell 16mmカメラで撮られた」と述べています。

以上の結果から、ボックス・カーとグレート・アーティストの2機から長崎原爆きのこ雲が撮影されたことがわかります。アグニューフィルムでは長崎きのこ雲の映像が2度現れること、映像の中に飛行機の四角い窓と丸い窓の両方が映っていることもあり、さらなる映像分析が必要であると考えています。

4、長崎原爆きのこ雲映像の解析

次に、3D地図ソフトのWing-beat（扇精光ソリューションズ株式会社）とGoogle Earthを活用し、長崎原爆きのこ雲映像からパノラマ写真を作成し、写真と映像を組み合わせ、解析を行いました。【写真4-1】はきのこ雲の最初の部分です。投下後、

地上503mで核爆発すると、100万分の1秒で数百万度、数十万気圧になります。1万分の1秒で半径15m、30万度の火球が形成され、衝撃波が火球を離れて伝搬し、その後を追って火球も膨張します。0.1秒くらいで火球の大きさは大体200mで温度は7000度くらいになります。太陽表面が6000～7000度ですから、これに相当するのが0.1秒後だということです。核爆発後、3秒間でTNT火薬21ktの爆発に相当するエネルギーを放出しました。

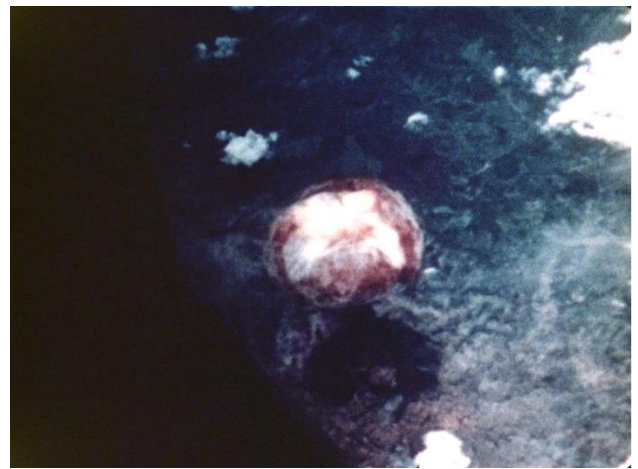


写真4-1 長崎原爆のきのこ雲

ファットマン爆弾は4.5tですが、長崎で使われたのはプルトニウム6.2kgで、その内の約1kgが核分裂し核爆発を起こしました。核物質のプルトニウムコア自体は6.2kgですから、手で持てる重さです。アグニューがこのプルトニウムコアを持っている写真もあります。この一発の核爆弾による攻撃が非常に大きな破壊力を示し、多数の市民を巻き込んだ無差別攻撃である一方、攻撃する側は一人の犠牲者も出ないものでした。さらに核爆発は爆風、熱線に加えて放射線を伴うことにより、人体に対して初期および残留放射線障害に加え、今日まで後障害が生じ続けています。

次に【写真4-1】のきのこ雲映像を見てみましょう。きのこ雲の背後に三角形が映っています。【写真4-2】は被爆前の航空写真で、3D地図ソフトWing-beatを使っています。



写真4-2 Wing-beat (被爆前)



写真4-4 被爆直後の長崎港

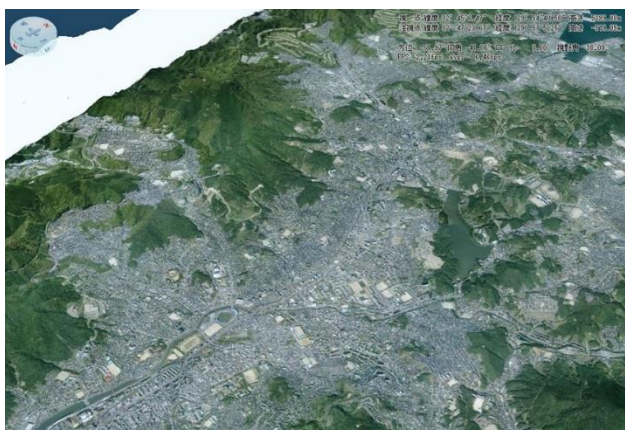


写真4-3 Wing-beat (現在)



写真4-5 被爆前の長崎港

この映像には岩屋山の崩れの三角形が映っていますし、浦上水源地、住吉、松山がわかります。Wing-beatは非常に便利で、被爆前後と現在の映像の変換が可能です。【写真4-3】は現在の映像で、岩屋山、浦上水源地、住吉、松山など、被爆当時の場所が現在のどこかということを知ることができます。



写真4-6 被爆後の長崎港

【写真4-4】は投下直後の長崎港の映像です。ちょっと見づらいかもかもしれませんが、左下の所に白い影が2つあります。【写真4-5】は1945年8月7日の写真で、港にその2隻が映っています。

【写真4-6】は原爆投下後8月10日のため、海が濁って見にくいですが、港に船が2隻あります。これは平和推進協会写真資料調査部会の松田齊さんにコピーしてもらったものです。田中孟さんのホームページ『長崎原爆の手記／原爆を忘れぬために』によると、「港の中央に停泊している中型船は、川南造船所で建造された戦時標準船で、進水はしたが運航に適さず、長期間係留されたままになっていた」と記されています。

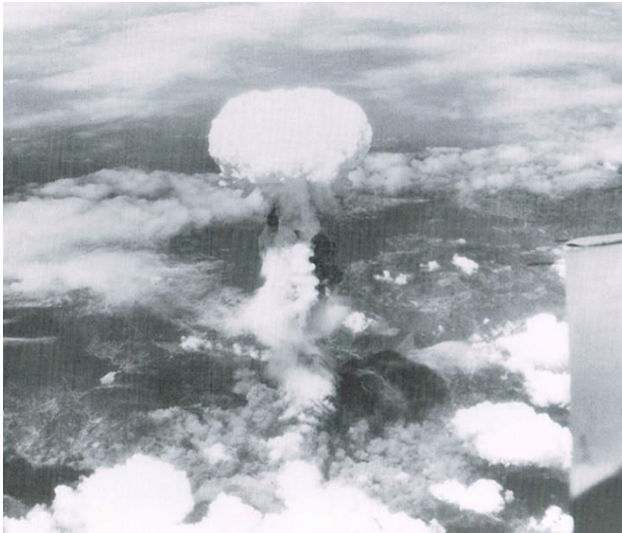


写真4-7 長崎原爆きのこ雲

【写真4-7】では、左下の長崎港、福田から三重へ、三重の見崎町、三重漁港の螺崎辺りが映っています。【写真4-8】がGoogle Earthで見た時の現在の写真で、同じ形の海岸線がわかります。南の方を撮影した【写真4-9】では島影が映っています。【写真4-10】はGoogle Earthで長崎上空から南の方を見たもので、天草諸島と甕島列島が映っています。鹿児島からきのこ雲が見えたという証言がありますが、これから可能であるとわかるわけです。【写真4-11】は大村から見

たきのこ雲で、先ほどの【写真4-9】と同様にきのこ雲の上部が2つに分離しています。



写真4-8 Google Earth（西方向の海岸線）



写真4-9 南方向の映像



写真4-10 Google Earth（南方向）



写真4-11 大村からのきのこ雲

次に【写真4-1】の初期段階のきのこ雲右上側の雲の形に注目してみます。【写真4-12】の左側にも同じ形の雲がありますから、【写真4-13】のように重ねてパノラマ写真を作成すると、きのこ雲の周りにリング状の雲があることがわかります。これはウィルソン雲といって衝撃波によって作られる雲です。【写真4-14】はよく知られた香焼から見たきのこ雲の写真ですが、このきのこ雲の周りにも先ほどのリング状のウィルソン雲が見えています。



写真4-12 ウィルソン雲



写真4-13 パノラマ写真



写真4-14 香焼からのきのこ雲

5、長崎総合科学大学生の取り組み

(1) 長崎原爆きのこ雲撮影機の飛行ルート
の解析

長崎原爆きのこ雲を撮影した B29 の飛行ルート

を明らかにする課題を野間仁根君と丸田寛君が取り組みました。新聞記事（毎日新聞 2015年7月18日）【写真5-1】の左が野間君、右が丸田君です。解析方法は以下の通りです。



写真5-1 新聞記事（2015年7月18日）

- ①動画からパノラマ写真を作成する。
- ②パノラマ写真をOHPシートに印刷する。
- ③印刷したパノラマ写真をパソコンの画面に貼る。
- ④パソコン画面上のGoogle Earthの地形と照らし合わせる。
- ⑤きのこ雲撮影機の位置の緯度・経度と高度をGoogle Earthの視点から決定する。
- ⑥地図上にポイントを打ち、きのこ雲撮影機の位置をGoogle Earth上に図示する。
- ⑦他のパノラマ写真についても、同様な手続きを行い、きのこ雲撮影機の飛行ルートを確認する。



写真5-2 パノラマ写真

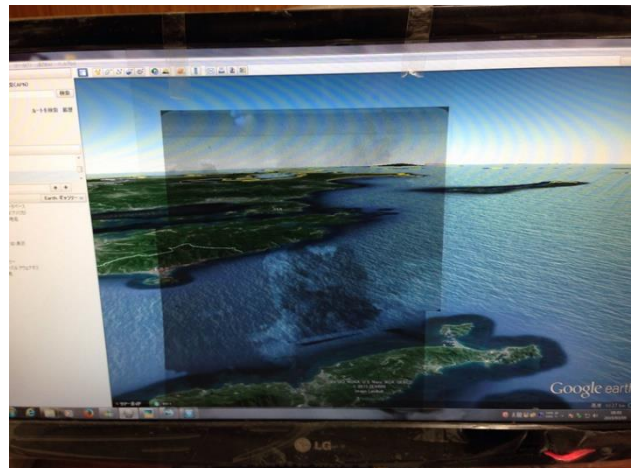


写真5-3 パソコン画面



写真5-4 視点の緯度、経度、高度

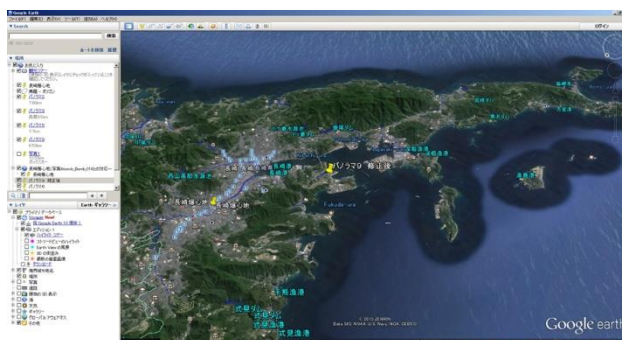


写真5-5 Google Earth上にポイント

具体的に説明していきますと、【写真5-2】は動画の3枚の映像から作成したパノラマ写真です。この映像から全体の構図と背後の地形が詳しくわかってきます。【写真5-3】のようにパノラマ写真とパソコン画面のGoogle Earthの地形と照らし合わせ、Google Earth画面が【写真5-4】のようにどの高度のどの位置から見たものかということ調べて、その地点を【写真5-5】のようにGoogle Earth上にポイントを打っていきます。それをつなげていけば、飛行ルートがわかるということです。きのこ雲撮影機の飛行ルートは以下になります。

① 東から侵入した B29 は長崎市上空進入後、左に155度旋回する。

- ② 網場近くの海岸線上まで飛行した B29 は、網場湾を越え引き続き左旋回し、大村湾南の津水湾方面に向かう。
- ③ 大村湾南側の上空を飛行した B29 は、三重港方面に飛行する。



写真5-6 撮影機の飛行ルート

【写真5-6】は撮影機の飛行ルートを示したもので、地図上のポイントをつなげ合わせた結果を示しています。ここで写真⑥だけは動画から作成したパノラマ写真ではなく B29 からの写真を使っています。

(2) 長崎原爆被害空撮映像撮影機の飛行ルートの解析

次の取り組みは米国戦略爆撃調査団の長崎原爆被害空撮映像の画像解析と 3D 地図ソフトの活用により、撮影機の飛行ルートを求めることです。

【写真5-7】はこの課題に取り組む原田康平君と久松朋史君です。



写真5-7 原田康平君と久松朋史君



写真5-8 動画とWing-beatの画像

解析方法は以下の通りです。

- ①空撮映像から開始，終了と途中の特徴的な数か所の時点の静止画像を選択する。
- ②3D地図ソフトであるWing-beatを活用して，被爆直後の3D化された画像から同じ高度，方向，地点から見た画像を選択する。
- ③Wing-beat上で画像変換機能(被爆直後→現在)を使い，対応する現在の画像を求める。
- ④この画像を使い，Google Earthを使って，地上を撮影した飛行機的位置，高度を調べる。
- ⑤地点(位置，高度)をつないで，撮影機の飛行ルートを求める。

空撮映像による飛行ルートは全体で24ルートで，南から北に行くのが11ルート，北から南に行くのが13ルートです。次に南から北に行くルートの一つである立神から松山町までのルートの空撮映像を見てもらいます。(上映1分27秒)



写真5-9 一致する画像を探す

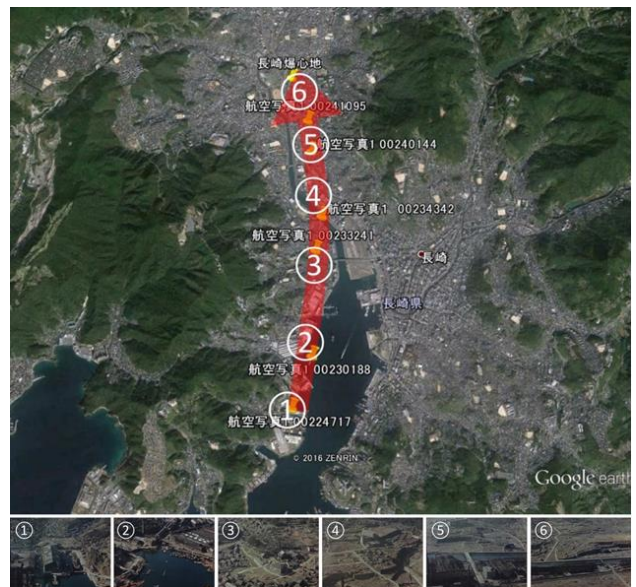


写真5-10 撮影機の飛行ルート

【写真5-8】の左側が今の映像から切り取った画像で，右側がWing-beatの画像です。次に右側のWing-beatを活用して，左側の被爆後の画像と

同じ画像【写真5-9】となる所を見つけます。今度はWing-beat上で画像変換機能（被爆直後→現在）を使い、対応する現在の画像に切り替えて、この現在の画像と一致するGoogle Earthの画像を探し出し、撮影位置と高度を調べます。【写真5-10】は各撮影地点を番号で示したもので、それをつないでいくと撮影機の飛行ルートを求めることができます。以上の結果から、撮影機は立神から松山町まで浦上川に沿って北上していることがわかりました。今24ルートの半分が終わったところです。この解析から長崎原爆被害空撮映像と全体の飛行ルートを分析し、長崎原爆被害の地形による影響の特徴とともに、米軍がどういう目的で空撮を行ったのかを調べたいと考えています。

6, おわりに

「被爆の実相」「被爆者の体験」の継承には「見て」「聞いて」「知って」「感じて」「考える」ことが大切です。そのためには被爆者の証言、遺品、被爆遺構、被爆写真などの原爆に関する写真、映像、文学、絵画などに接することです。私たちは映像を使って継承の取り組みを続けたいと考えています。映像の果たす役割を考えたとき、映像が身近に広く行き渡っていることで、その活用の可能性を感じる一方で、その限界もいろいろと見えてきます。映像は撮影者の目を通したものをしていることになるので、撮影者の目的、意図を考えないといけません。そのため、撮影されたものだけでなく、撮影されなかったものも考えなければなりません。映像では原爆被害の中で目に見える構造物の物理的破壊はよくわかりますが、人々の悲惨な生活や思いなどは映像から直接知ることはできません。また、撮影された時期、場所の限界もあります。

このような限界がある一方で、映像には「被爆の実相」を考えるときに、私たちの想像力に働きかけて、具体的なイメージを浮かべやすくしてくれる面があります。動画でカラー映像の場合は特に、「過去がよみがえる」というリアルな印象を持

つことができます。「被爆の実相」「被爆者の体験」についての他の様々な表現とも関連付けながら、映像の特色を生かした活用法を今後も考えていきたいと思っています。

アメリカの批評家で作家でもあるスーザン・ソントグが、「戦争と写真」をめぐる考察で「映像という形態で何かを見る。それを契機として、観察、学習、傾注が始まる。写真が私たちに代わって道義的、知的な仕事をするわけにはいかない。だが、私たちが私たちの道を歩き始める契機にはなるのだ」（『この時代に想う テロへの眼差し』）と述べ、「写真も、撮影の対象に選ばとられた苦しみの歴史と原因にかんしてわれわれの無知を補強してくれるものではない。そのような映像は、既存の勢力がもたらす巨大な痛みへと注意を向け、考え、知り、調査をする契機以上のものではない」（『他者の苦痛へのまなざし』）と指摘しています。被爆体験を聞き、調べ、記録し、表現し、行動することにより、被爆者の体験と体験を通した思いに近づくことができます。個人の行動と思いはまわりの人びとに受け継がれ、集団の行動と思いは「社会的記憶」になり、地域社会に継承されて文化を形成します。平和を希求する個人と集団の「経験と思想」の継承が平和文化を創造し、平和を築く力になります。「既存の勢力がもたらす巨大な痛みへと注意を向け、考え、知り、調査をする」という一連の行為を始めることが、「被爆者の体験」の継承の第一歩となると思います。

今日のテーマは「ボックス・カーの見た長崎」ですが、ボックス・カーの機長であるスウィーニーが、1945年9月の初めに長崎に来ていました。10月27日、長崎メディア平和講座「伝えんば」で平和推進協会写真資料調査部会の部会長である深堀好敏さんが「長崎原爆写真余話」という話をされました。スウィーニーがジープの上にいる写真を示しながら、スウィーニーの本『私はヒロシマ・ナガサキに原爆を投下した』の次の一節を読まれました。

「トラックは盆地の半ばで停車した。私は一人でレンガの歩道を、8月9日の爆心地と思われる場所まで歩いてみた。・・・当時私は戦争の残虐性について、苦しんだのが自国の人間であろうと他国の人間であろうと決して誇りや快感を感じたわけではなく、それは今でも変わらない。すべての命はかけがえのないものであるからだ。だが私は自分が立っていたその都市を爆撃したことについて、後悔も罪悪感も感じなかった」「破壊された周囲の光景が物語っていた苦しみは、日本の軍国主義文化の残虐さと、『下等な』民族を征服することを栄光とし日本がアジアを支配する運命にあると考えていた伝統によって、もたらされたものだからだ。後悔と罪悪感を抱くのは日本の国家のほうであり、偉大な野望を達成するために国民の犠牲を惜しまなかった軍の司令官たちこそが、とがめられるべきであった。私と搭乗員が長崎に飛んだのは戦争を終わらせるためであって、苦しみを与えるためではなかった。長崎の通りを歩きながら、我々は全く喜びを感じなかった。ただ我々にとっても、戦争が終わったのだという安堵感があるだけだった」

深堀さんの読まれたこの文章から、スウィーニーが被爆後の長崎に来ていたこと、写真を見ただけではわからない当時のスウィーニーの心情を知ることができます。

もう一つは『証言』の科学化ということです。秋月辰一郎さんが1973年の8月8日、「原爆と科学・教育・文化を考える夕べ」で『長崎の証言』をなぜ続けるか」という話をされています。「この科学者会議の場に来たのも、今後多くの分野で専門家である科学者のみなさんに、『証言』を科学してもらいたいからである。科学するといっても材料もなにもなくなってしまっているが、『証言』を材料に科学（*客観的に裏付けること）をしてもらいたい。文学してもらいたい。・・・私たちができることは、憶えていることを少しでも『証言』することであり、それが大切である。そしてそれら

が真実であるかどうかは今後検討してもらいたいものである」ということを述べておられます。『証言』を科学することは、証言を掘り起こすこととともに、私たちに残された大きな課題です。

最後に、今後の映像の活用法ですが、第1に長崎で「1945年8月9日に起こったこと」を想像し、感じて、考えるための手助けとなること、第2に被爆者の体験、経験を聞いて、その思いが生きるように活用すること、第3に原爆記録映像を分析し、映像に含まれているさまざまな情報を読み解くこと、第4に原爆を記録した写真と映像を関連づけ、両者の利点を生かして、「証言」の科学化に取り組み、被爆の実相を解明すること、第5に戦争を生む世界（社会と人間）のメカニズムを把握して、核兵器と戦争の廃絶を求める契機とすることを考えています。長崎原爆記録映像を活用して「被爆の実相」「被爆者の体験」の継承をすることが私たちの課題です。ご清聴ありがとうございました。

（注2、長崎ケーブルメディアは米国戦略爆撃調査団が長崎を撮影した全体で6時間34分のカラー映像を使って、番組『ながさき原爆記録全集～戦略爆撃調査団編～』を制作しました。この番組は第54回ギャラクシー賞の報道活動部門で優秀賞を受賞しました）